

奈良 勲(監修)・鶴見隆正(編)

《標準理学療法学 専門分野》  
日常生活活動学・生活環境学第2版

小林量作

新潟医療福祉大助教授・理学療法学

日常生活活動(ADL)学の講義を担当していて最初に悩むのは、テキストの選択である。基本的事項がわかりやすくまとめられ、臨床実習にも活用できる内容のテキストを欲張ると選択がなかなか難しいが、本書はこの要望を満たしており、推薦できる一書である。

本書は本来ならそれぞれで1冊となるべきADL学と生活環境学の2つの領域を1冊にまとめたものである。ADLと生活環境は相互関係にあることから2部構成にしたものであろう。内容は基本と具体的なことを簡明にまとめている。ADL学は「第1章総論」,「第2章各論—ADL指導の実践」(疾患別にI-IXまで),生活環境学は第1章から第7章まで構成されている。今回の第2版改訂に当たっては、内容を国際生活機能分類(ICF)の考え方に統一している。

ADL学では第1章の「II ADLと障害」でICFについて詳述,「VIII ADLを支援する機器(2)歩行補助具」の項を新設,生活環境学では第3章に介護保険法と関係が深い“支援費制度”の解説を追加,などの改訂がなされている。卒前教育のみでなく臨床にも即応できる改訂内容をめざしたという。内容には図表を多用して読者が理解しやすい編集の努力がうかがえる。せん越ながらあえて注文を記すならば、筆者が関わる在宅理学療法の立場から考えて、本来の生活の場である在宅環境と在宅ADL,あるいは入院中の生活の場であ

る病棟環境と病棟ADLなど、生活環境とADLをリンクさせた内容が加えられると学生にとっても、臨床家にとってもさらに有用な内容となろう。

筆者の経験では、理学療法士の経験を積むほど、また、患者・障害者の現実の生活に接するほど、ADLの重要性を強く認識する。そんな経験から、学生にADLの重要性は繰り返し説いても強調しすぎることはないと考えている。時代に即した明快なテキストを基にしてADL重視の考えを学生に伝えられればと思う。

ADLの自立度や方法は、ADL能力と活動を行う物理的環境との相互作用によって決まる。椅子からの起立が困難である場合、起立動作の練習をするだけではないし、直ちに手すりを付けることや座面を上げるなどの物理的環境整備だけで解決を図るわけでもない。起立が困難な原因を探り、起立に必要な運動機能を強化するのか、正しい起立方法の指導をするのか、物理的環境整備をするのか、あるいはこれらの組み合わせで解決を図るのかは、理学療法士が臨床でたびたび直面する思考過程である。運動機能、動作分析、物理的環境を関連づけて評価し、最良の方法を提示できることがADL学や生活環境学における理学療法士の専門性である。このような知識・技術は臨床場面で積極的に生かされてこそ意味をなす。臨床場面におけるADL指導や生活環境整備の充実には、常に理学療法士が意識していなければならない領域である。本書がADL学および生活環境学の重要性を改めて認識できる書として、学生にも、臨床家にも役立つことを願っている。

●B5判 336頁

定価 5,670円(本体 5,400円+税 5%)

2005年 医学書院・刊